

【学術論文】

小学校英語教科書「We Can! 1」「We Can! 2」の 文型出現頻度と題材について

渡慶次 正則

Frequency of sentence patterns and topics in elementary school English textbooks: *We Can! 1* and *We Can! 2*

TOKESHI Masanori

要旨

小学校英語教科書「We Can! 1」と「We Can! 2」の出現文型頻度と題材の関係について明らかにすることを目的とする。調査により次の結果が示された。第1に、目標文型の出現については、両教科書で35文型を抽出した。「We Can! 1」では、頻度は422例(平均12.1回)で、「We Can! 2」では、頻度は879例(平均25.1回)である。両教科書で16回以上出現している42.9%の文型については、習得の条件を満たしている(Nation, 2001)。第2に、教科書で出現する文型と第2言語早期習得研究およびCEFR-J Grammar Profile (A1)で出現する文型の約88%に整合性がある。しかし、現在進行形、所有-'s、規則動詞(enjoyedを除く)、3人称単数現在-s、We are ~.の5文型は出現しない。第3に、出現する文型と題材の関連は、児童の思い出や夢、自分や他人、児童の身近な生活、日本や外国の4カテゴリで、題材に合わせて児童の身近な生活や成長過程に関連性の高い文型が自然に出現している。最後に、教科書を横断的に頻出する文型については9文型を抽出し、特にI like apples(例)、I'm ~ (例)、She can swim fast.(例)、I want to ~ (例)の文型が横断的に出現する頻度が高い。今後の調査では教科書の語彙の出現も含めて総合的に児童の英語習得達成度を検証する必要がある。

キーワード：リスニング、小学校英語教育、教科書分析、第2言語習得研究、CEFR-J

I. はじめに

学習指導要領が改訂され(文部科学省, 2017a), 2020年から英語科目が、小学校3年生と4年生は「外国語活動」として、小学校5年生と6年生を対象に「外国語」として教科の形で提供されている。文部科学省は2018年からの移行期間に、学習目標や教材内容、言語活動等のモデルとして、小学校英語移行教材の「Let's Try! 1」(3年生用)、「Let's Try! 2」(4年生用)、「We Can! 1」(5年生用)、「We Can! 2」(6年生用)を発行して、配布した。小学校英語カリキュラムの変更に伴い、英語を教科として学習する5年生と6年生を対象に、2020年から初めて検定英語教科書が全国の教育行政区で採択され、使用されている。2020年度から出版社7社により検定教科書が発行されており、どの教科書も「We Can! 1」と「We Can! 2」との対応を重視している⁽¹⁾。特に、言語事項である文型(例: I like~)と題材(例: 6年生「夏

休みの思い出」)については、どの検定教科書も同様な構成と系列で教科書が編成されている。検定教科書を理解するためには、モデルとなっている「We Can! 1」と「We Can! 2」の文型と題材を分析し、理解することは重要であり、同様な研究がないことから本研究の重要性があると考えられる。

「小学校外国語活動・外国語研修ハンドブック」(文部科学省, 2017b)は、「意味のある言語活動を通して、児童に繰り返し体験的に理解させることが重要」(p.19)と述べている。本論では教科書で主にリスニング活動を通しての音声インプットがどの程度での頻度でくり返し出現し、その出現が習得に十分であるのか、また各題材が児童の身近な生活や発達段階に適しているのかを検証する。

II. 文献研究

1. 教科書分析の理論的な枠組み

本論では、下記のTomlinson (2015; 2017) が提案する教科書分析と評価の根拠となる5つの基準 (criteria for materials development and evaluation) を理論的枠組みとする。特に本論では論点を焦点化するために、1番目の原理について検証を行う。

第1点に、「使用している言語に触れること」(exposure to the language in use) が重要である。つまり教材が理解できるインプット (comprehensible input) を与え (Krashen, 1985), 言語の多様性や量が豊富で (rich), 学習者の生活に関連して意味があり (meaningful), 実際に用いられる生の言語に触れ (authentic), 様々な方法で一定期間に何度も使用されることにより再利用される (recycled) ことである。

第2点に「感情の積極的な関わり」(affective engagement) を考慮することが必要である。つまり、教材は笑いや興奮、楽しさ、同情などの感情で反応すること、外国語学習経験が肯定的な姿勢を与え、自信や自己尊重を高めるべきである。

第3点に「認知の積極的な関わり」(cognitive engagement) に配慮する事である。動機づけは肯定的な態度の心理的な面ではなく、批判的な思考や創造的な思考などを刺激することを教材は配慮すべきである。簡単で意味のない練習問題や単純な音読をくり返すことは言語習得につながらない。

第4点に、「意味も留意しながら (後に)、言語の形式に注意する」(pay attention to form whilst or after focusing on meaning) 事を考慮しなければならない。場面や言語の目的を考慮したコミュニケーション中心の活動では時々、誤った言語形式をそのまま使用し続ける場合がある。

最後に、「コミュニケーションのために言語使用の多くの機会を与える」(plentiful opportunities to use the language for communication) が必要となる。

本論では、1番目の原理について焦点化するが、インプットが豊富であるかどうかの判断基準が必要だと考える。語彙研究第一人者のNation (2001) は関連する多数の先行研究を検証した結果、新しい単語が記憶として定着されるには意味のある状況で、16回接触する必要があると報告している。本論では文型の習得についてもNationの説に従い、16回以上出現する音声インプットを豊富であると定義する。また、英語学習は、集中的に学習した後にくり返すことなく、はしごを登るようにステップごとに進行するのではなく、同じ言語事項をくり返し学習しながらゆるやかにらせん状 (spiral) に

進行する方法が良いとされる (Brumfit, 1981)。つまり、教科書では、Unit内で集中的に反復されたとしても、異なるUnit間で同じ語彙や文型を反復することを考慮していない場合が多い (Arnold & Rixon, 2008; Ghosn, 2013)。本論では目標文型が横断的に頻繁に出現するかを着目する。

2. 早期第2言語習得研究で出現する文型とCEFR-J Grammar Profile (A1レベル) で出現する文型

第2言語習得研究では初期 (特に学齢期前) に習得する形態素の研究により、出現する文型が報告されている。小学校で出現する英語文型は、早期言語習得研究の結果と整合性が高いことがより望ましいと考える。早期第2言語習得研究は主に形態素の習得を中心に研究しているため、完全な文章の研究にはなっていない。補完するために、CEFR (Council of Europe, 2001) の日本版研究として、投野科研⁽²⁾により2008年から長期的に調査されており、2020年2月にCEFRのレベル別に文型を報告したCEFR-J Grammar Profile教員版を枠組みとして用いる。CEFR-J Grammar Profileは263文型を抽出し、頻度を調べている。実際に比較検証する文型については、重複をさけるために下記の4.1で述べる。

3. 小学校英語共通教材の変遷

小学校英語教育の推進にあたり、文部科学省より発行された共通教材を概観する。2011年に「外国語活動」のスタートに際して、「英語ノート5年」(文部科学省, 2008a, 平成20年)と「英語ノート6年」(文部科学省, 2008b, 平成20年)が発行され、全国の拠点校に配布された。さらに後継版として小学校5年生対象の「Hi, friends! 1」(文科省, 2012a, 平成24年)と6年生対象の「Hi, friends! 2」(文科省, 2012b, 平成24年)が発行され、配布された。2020年からスタートした「外国語活動」の移行教材として小学校3年生対象の「Let's Try! 1」(文科省, 2019a, 平成31年)と4年生対象の「Let's Try! 2」(文科省, 2019b, 平成31年)を、「外国語」の移行教材として5年生対象の「We Can! 1」(文科省, 2019c, 平成31年)と6年生対象の「We Can! 2」(文科省, 2019d, 平成31年)を発行・配布した。

「We Can! 1」と「We Can! 2」に関する先行研究としては、第2言語習得と脳科学との関係 (澁井, 2019), 異文化理解 (出口マクドナルド, 2019), 思考力・判断力 (平川・萬谷, 2018), 英語読み聞かせ (丹藤, 2019) などの研究がなされている一方で、文型と題材に関する研究はまだなされていない。

III. 調査方法

1. リサーチ・クエスチョン

本研究は、次のリサーチ・クエスチョンへの答えを探ることにより、移行期教材「We Can! 1」と「We Can! 2」で提示されている文型と題材について検証する。

- (1) 「We Can! 1」と「We Can! 2」で出現している目標文型の種類には、早期英語習得研究およびCEFR-J Grammar Profileとの整合性はあるか。
- (2) 「We Can! 1」と「We Can! 2」は豊富なりスニング・インプットに触れるために目標文型の出現頻度はどの程度であるか。
- (3) 「We Can! 1」と「We Can! 2」は豊富なりスニング・インプットに触れるためにどの程度、目標文型が横断的に頻繁に出現しているか。
- (4) 「We Can! 1」と「We Can! 2」で出現する目標文型は、自然な場面・状況で使用される設定になっているか。

2. 調査対象資料

移行期教材「We Can! 1」と「We Can! 2」で提示されている文型を調査するために、主に「We Can! 1 指導書 (96頁)」（文部科学省, 2017c) と「We Can! 2 指導書 (96頁)」（文部科学省, 2017d) を用いた。両指導書には授業で使用されるCDやDVDの音声スクリプトがすべて掲載されている。具体的には、各UnitのLet's Listen, Let's Watch and Think, Let's Chant, Small Talkの音声スクリプトに出現する文型を、小学校学習指導要領解説「外国語」（文部科学省, 2017a, pp.92-98) で示されている英文を基準に、文型ごとに出現する頻度を数え、一覧表にまとめた（資料1を参照）。

「We Can! 1」と「We Can! 2」には、Let's Play, Activity, Let's Talkの言語活動もあるが、文型の出現頻度については、児童の活動状況により異なると考え、含めていない。さらに、Let's Read & Writeは書き言葉に関する活動なので含めていない。

3. 文型出現頻度の調査方法

上記で述べたように、「We Can! 1」と「We Can! 2」の音声スクリプトの対象となる英文を学習指導要領解説 (2017a) で示された文型ごとに、各Unitの活動別に出現する頻度を数えた。

文型については、学習指導要領と全く同じ文型でない場合もあったために各文型は次の様に分類した。質問文と返答文をひとつのカテゴリーにまとめた。例えば、1) What (sport) do you like?⁽³⁾ とI like apples

very much., 2) I want to 動詞～. (go to 除く)⁽⁴⁾, 3) What do you want to be～?とI want to be a ～.⁽⁵⁾ などの質問文と応答文である。

文法上は同じ分類に属するが、児童の経験や身近な場面を表現するために必要な文は別に分類した。例えば、I went～.とI saw/ate～は不規則動詞の過去形として同じカテゴリーでまとめるべきだが、特にI went～.は児童が訪問した場所を表現するために出現数の頻度が高いため個別に分類した。さらに、文型ではDo you動詞～?の文型でまとめるべきだが、児童の身近な場面の表現に必要であると考え、Do you want (shoes)? (誕生日に欲しい物をたずねる), Do you have～on～? (1週間の時間割をたずねる), Do you like～?/I like～. (好きな物をたずねて、答える) については個別に分類した。また、自分の体験 (I enjoyed～.) と自分の町で楽しむこと (We can enjoy swimming.) は異なる目的を持つために、同じ文型であるが個別に分類した。

さらに、「We Can! 1」と「We Can! 2」には出現しない場合でも、学習指導要領で文例が示されている項目は、リストとして示している。

IV. 調査結果

1. 教科書の文型と第2言語習得研究・CEFR-J Grammar Profileとの整合性について

最初に、第2言語習得研究とCEFR-J Grammar Profile (2020) における初期の英語習得文型と両教科書で出現する文型に整合性があるかを検証する。本稿では、研究成果より習得初期にほぼ確実に出現する文型が小学校教科書で出現しているかに着目する。上記に述べたように、英語習得初期に習得される英語形態素とCEFR-J Grammar Profile (A1レベル) を用いて比較検証をする。Lightbown & Spada (2013) によると第2言語として英語を習得する初期は次の形態素の順序で習得されると報告している。現在進行-ing (Mommy is running.) → 複数形-s (two books) → 不規則動詞過去 (Baby went) → 所有-'s (Daddy's hat) → be動詞 (Mommy is happy.) → 冠詞 (the/a) → 規則動詞-ed (she walked) → 3人称単数現在-s (she runs) → 助動詞be (he is coming)である。特筆すべきは、不規則動詞過去形が規則動詞過去形より先に習得されることである。

CEFR-J Grammar Profile教員版の中で特に最も低いA1レベルにのみ出現する文型をサンプリングした。以下がその文型で、a/an/the+名詞、命令文 (Pleaseを含む), Wh-疑問詞 (What～?), I am～ (疑問文, 否定文を含む), You are～ (疑問文, 否定文を含む), He/She is～ (疑問文, 否定文を含む), We are～ (疑

問文, 否定文を含む), They are~ (疑問文, 否定文を含む), my/our/your/his/her/its/their+名詞, me/you/us/him/her/them, This/That is~ (疑問文, 否定文を含む), It is~ (疑問文, 否定文を含む), this/that+名詞, some/any+名詞, and/but, or, 一般動詞現在, 3人称単数現在である。その中で小学生には困難と考えられる次の文型, They are~ (疑問文, 否定文を含む), my/our/your/his/her/its/their+名詞, me/you/us/him/her/them, some/any+名詞, and/but, orは下の分析では除外した。

表1で抽出された教科書の文型と第2言語習得研究で習得初期に観察される文型およびCEFR-J Grammar Profile A1レベルの文型を比べると, 上記の20文型中15文型に整合性がある, 実際には, 例えばWh-疑問文はwhat, where, when, whoの文型で出現したり, 他の文型も細分化して出現している。全体的には約88%の整合性がある(全40文型[表1の抽出35文型+未出現5文型]中35文型出現)。次の5文型は出現しない。

[現在進行形, 所有-'s, 規則動詞(enjoyedを除く), 3人称単数現在, We are~.]である。

上記の5文型が小学校英語教科書に含まれていない理由としては, 文法的な説明を避けるために意図的に除外されたと考える(2020年10月7日実施のZoomによる科研費研究小学校英語教員授業実践オンライン研修(研究責任者: 渡慶次正則主催)にて聞き取り)。小学校学習指導要領解説(2017a)によると「文及び文構造の指導にあたっては, 文法の用語や用法の指導を行うのではなく, 言語活動の中で基本的な表現として繰り返しふれることを通して指導することとした。」(p.66)と述べている。具体的には, 3人称単数の文法説明を避けるために, 表1によるとShe can swim fast(番号14)やShe enjoyed~ing(番号24)の表現で置き換えている。不規則動詞は, I went (saw/ate)~(番号26, 27)は出現しているが, enjoyed以外の規則動詞は出現していない。一般的に中学校の教科書では, 規則動詞を最初に学習した後不規則動詞を学習する。enjoyedを導入しているのは, She enjoyed~の様に3人称単数形の導入をさけるためであると考えられる。複数形は「Let's Try! 1」(3年生対象)のUnit 3で既に導入されているが, 所有-'sは導入されていない。英語学習初期は“here and now”の原則があり, 目に見えている物(here)や, 現在起きていること(now)を中心に教材を作成するのが一般的である(Krashen, 1985)。身近な行動や事がらについて理解することが基本であり, 所有-'sや現在進行形は学習されるべきであると筆者は考える。さらに, We are~が

導入されていないのは, 複数形の代名詞と単数形の代名詞(He/She/I)の文法的な説明をさけるためであると推測する。形態素は習得が難しく, 児童の実際の発話では省略しても意味が伝わるために, 省略する傾向がある(Ghosn, 2013)という主張もあり, 複雑な形態素の出現を制限する必要はないのではないか。

2. 目標文型の出現頻度について

次に出現する頻度が目標文型の習得に十分であるかどうかについて論じる。学習者の動機づけがなされており, 学習環境や教授方法に問題がなければ, Nation(2001)によると16回以上の語彙出現が習得を可能にする。その言語出現頻度を基準にして, 各教科書で16回以上出現した文型を基準として本論では推察を行う。

「We Can! 1 指導書」と「We Can! 2 指導書」を検証した結果, 出現する文型の一覧と出現数を表1に示している。下記に表1に示されている文型の抽出方法について説明する。

「We Can! 1」に出現する文型と「We Can! 2」に出現する文型を上記に示された文型の分類方針に従い分類した結果, 43文型を抽出し, 文型ごとに頻度を算出した。

次の分析作業として, 基本的に目標文型の出現頻度が英語習得に十分であるか確かめるために次の文型は除外した。まず, 学習指導要領で文型として示されているが, 両教科書に全く出現しない文型は4文型で, Do you have (P.E) on (~day)? Yes, I do./ No, I don't.とAre you good at ~? Yes, I am./ No, I'm not.の2文型はLet' Try1(1&2)で既に学習済みである。Don't turn here. / Don't be noisy.とShe isn't a teacher.の文型は「Let' Try! 1」「Let' Try! 2」「We Can! 1」「We Can! 2」の4つの教科書に全く出現しない。全く出現しない文型についてはその原因について下記で他に論じる。さらに, 「We Can! 1」と「We Can! 2」での出現数が極端に少ない文型の中ですでに「Let' Try! 1」「Let' Try! 2」で既習済みである文型が3文型で, What do you want for your birthday?(「Let' Try! 2で既習)(2例), This is for you. Thank you. You're welcome. Happy birthday. (Let' Try! 1で既習)(5例), It's for ~./ This is for~. (Let' Try! 1で既習)(7例)である。

最終的に, 表1に示されているように, 「We Can! 1」では, 対象は全体で35文型を抽出し, 出現頻度は422例(平均12.1回)となり, 16回以上出現している文型は13文型で教科書全体の37.1%である。「We Can! 2」では, 抽出文型は35文型で, 出現頻度は879例(平均25.1回)となり, 16回以上出現している文型は17文型で教科書全体の48.6%である。「We Can! 1」と「We Can! 2」の両教科書の総計は, 出現頻度は1,301例であり, 16

回以上出現している文型の出現平均は42.9%（70文型中30文型）である。つまり、何度もリスニング・インプットに触れさせ理想的な言語習得環境を作り出す工夫がなされている。付記すると、この出現数は教科書のLet's ListenやWatch and ThinkのCDやDVDを使用してリスニング・インプットとして触れる英語文型で、実際にはLet's talkやActivityで目標文型を使用する場面が多く、さらに高い頻度で目標文型に触れると推測される。

中学校検定教科書で最も採択率の高いNew Horizon

シリーズ（東京書籍）のNew Horizon 2年生教科書と比較すると本文とリスニングに出現する頻度は5回から11回の範囲で平均7回程度である。中学校の検定英語教科書と比較すると、文型の出現数は非常に多く、音声インプットに触れる機会を豊富に与えている。中学生は同じ文型を繰り返し聞くことには、成長段階に適さないのに対し、児童はくり返して同じインプットを受けることに抵抗が少なく（Bland, 2015）、意味のある場面でも、無意識に習得している可能性もある。

表1：「We Can! 1」と「We Can! 2」で出現する文型の種類と出現数
（16回以上出現する文型は斜字体で示している）

番号	文 型	WC 1 出現数	WC 2 出現数
1	Hello, /I'm (Saki). /Nice to meet you./ I'm from ~	22	98
2	How do you spell your name KOSEI.	3	4
3	I like apples very much./I like it./What (sport) do you like?	78	108
4	I don't like soccer very much.	8	9
5	What do you want?/I want a new ball.	22	32
6	What do you want for your birthday? (Let's Try! 2で既習)	2	0
7	This is for you. Thank you. You're welcome. Happy birthday. (Let's Try! 1既習)	5	0
8	When is your birthday?/My birthday is ~	12	10
9	When is ~? /It's ~ .	4	3
10	Do you want (new shoes 名詞のみ)?	5	0
11	Do you have (P.E) on (~ day)? Yes, I do./ No, I don't. (Let's Try! 2で既習)	0	0
12	What do you study (have) on ~ day? I (We) study ~ .	23	18
13	What time do you get up/ ~ ?/ I / we (sometimes) get up at (6:00).	59	1
14	I / We play baseball/~ .	0	9
15	Can you (dance well)?	14	17
16	I/ You/ He/ She can swim fast.	130	79
17	I can't play the piano.	16	4
18	Where do you want to go?/I want to go to Italy.	11	4
19	What do you want to ~ /I want to動詞~ . (go to 除く)	19	67
20	What do you want to be ~ / I want to be a ~ .	5	27
21	We don't have (a park).	0	9
22	Do you like (blue)? Yes, I do./ No, I don't.を含む	13	15
23	Are you from Canada? (Are you?はLet's Try! 1で既習)	1	0
24	I / H/She enjoyed ~ ing.	0	37
25	We can enjoy ~ ng.	0	4
26	I went to Okinawa.	0	39
27	I saw/ate ~ .	0	23
28	I like playing the piano./I enjoy swimming.	1	17
29	Where is ~ ?/ You can see it on your right/ left. It's on/in/under/by ~ .	67	2
30	Go straight for three blocks/ Turn~./ keep going. Please be quiet.	10	0
31	What would you like ~ ?/ I'd like ~ .	25	0
32	It's for ~ ./ This is for ~ . (Let's Try! 1で既習)	7	0
33	How much? It's ~ yen.	3	2

番号	文 型	WC 1 出現数	WC 2 出現数
34	Who is/ am ～ ?/ This is ˘.	11	10
35	He/ She is a good soccer player.	21	13
36	He/ She/ It is ˘. (状態・気持ち)/He/She /It is ˘	52	64
37	I am/ He/ She is (not) good at ～ ing/ ˘.	16	16
38	What ～ do you have in ～ ? / We have ～ in ˘.	0	65
39	It was ˘. / ˘ was/ were …	0	56
40	What's your best memory? My best memory is ˘.	0	17
41	Don't turn here. / Don't be noisy.	0	0
42	She isn't a teacher.	0	0
43	Are you good at ˘? Yes, I am./ No, I'm not. (Are you ˘ ?はLet's Try! 1で既習)	0	0
小計出現数		422	879
総計出現数			1,301

3. 出現文型と児童に身近に関連のある題材、場面、状況について

「小学校外国語活動・外国語研修ハンドブック」(2017b)は、目標の文や文構造は児童に身近な場面や状況で、目的のある題材で、必然的に使用されるべきであると述べている。

必然的であるかどうかは難しい判断を求められるが、各Unitの題材や場面が目標文型が自然に出現する設定になっているかを検証する。分析の結果、次の4つのカテゴリに分けて説明できる。表2には、「We Can! 1」「We Can! 2」の題材の一覧をまとめ、巻末の資料1に題材と出現文型の実際の頻度を一部抜粋して示している(紙幅の関係で全体を示すことができない)。

第1のカテゴリは、表1と表2によると、「We Can! 2」については児童の思い出や夢と目標文型の強い関連がみられる。Unit 5「夏休みの思い出」でI went～, I saw/ate～, I enjoyed～ingが頻繁に出現し、夏休みの思い出や経験を音声インプットとして繰り返し聞くことが興味・関心の点でも有効である。Unit 7「小学校生活・思い出」では、I went～, I enjoyed～ingの表現が頻出する(資料1を参照)。Unit 5と同様にUnit 6「オリンピック・パラリンピック」では、I want to (watch)～が頻繁に出現し、2020年に開催される大会との関連が強く、導入による学習効果は高いと考える。Unit 8「将来の夢・職業」では、I want to be～が頻繁に出現し、自分の将来の夢や職業を表現する文型を繰り返し聞く設定となっている。小学校最後で学習するUnit 9「中学校生活・部活動」では、I want to～が頻繁に出現し(資料1を参照)、中学生活で行いたい事や所属したい部活動について自然に習得できるように工夫されている。

第2のカテゴリは、自分や他人についての表現で

ある。「We Can! 1」では、Unit 1「アルファベット：自己紹介」でI am～やI like～などの文型が多く出現し、同様に「We Can! 2」Unit 1「自己紹介」でもI like～, I am good at～などの文型が多数出現する。「We Can! 1」のUnit 2では、My birthday is～(日付), I (don't) like～, I want～などの表現が集中的に出現する。自分のみではなく、他者も表現する題材は、「We Can! 1」のUnit 5「できること」で、I can～のみではなく、She/he can (can't)～の文型が出現する。さらに、「We Can! 1」のUnit 9「あこがれの人」でHe/She is good at～, He/She can cook well/is kind.などの文型が出現し他人を表現する。また、「We Can! 2」のUnit 3「人物紹介」でI like /have/eat/studyで自分を紹介し、He/She is famous (great).などの文型で他人を紹介している。

第3のカテゴリは児童の身近な生活についての表現である。「We Can! 1」のUnit 3「学校生活・教科・職業」では、Do you have (PE) on Monday? / I (want to) study math.などの文型が出現し、学校の教科や時間割について学習できるように設定されている。さらに、「We Can! 1」のUnit 4「一日の生活」では、What time do you (get up) ?, I get up at～などの表現で児童の一日の生活を表現する文型が多数出現する。「We Can! 1」のUnit 7「位置と場所」では、Where is ～? の質問に対して、Go straight～, It is under/by/in/on～の表現が部屋にある物を、Go straight/Turn leftなどの表現が地域の街を案内する設定となっている。同様に、「We Can! 2」のUnit 4「自分たちの町・地域」では、We (don't) have a park, We can enjoy (fishing)などの表現が出現し、地域の特徴について学習できる設定がなされている。加えて、「We Can! 1」のUnit 8「料理・値段」の題材では、What would you like?, I'd like～, How

表2：「We Can! 1」と「We Can! 2」の題材一覧

We Can! 1	We Can! 2
Unit 1「アルファベット・自己紹介」	Unit 1「自己紹介」
Unit 2「行事・誕生日」	Unit 2「日本の文化」
Unit 3「学校生活・教科・職業」	Unit 3「人物紹介」
Unit 4「一日の生活」	Unit 4「自分たちの町・地域」
Unit 5「できること」	Unit 5「夏休みの思い出」
Unit 6「行ってみたい国や地域」	Unit 6「オリンピック・パラリンピック」
Unit 7「位置と場所」	Unit 7「小学校生活・思い出」
Unit 8「料理・値段」	Unit 8「将来の夢・職業」
Unit 9「あこがれの人」	Unit 9「中学校生活・部活動」

much～?, It's ~yen.の表現が出現し、身近な生活で英語で飲食物を注文する表現が学習できるようになっている。

第4のカテゴリーは、日本や外国について知る表現である。具体的には、「We Can! 1」のUnit 6「行ってみたい国や地域」では、Where do you want to go?, I want to see/go~, It's exciting.などの関連する表現が出現し学習できるようになっている。さらに、「We Can! 2」のUnit 2「日本の文化」では、In summer we have (fireworks festival)., We have soba.などの表現が出現し、自国の文化について英語で学習できる設定になっている。

まとめると、第1カテゴリーでは特に6年生で夏休みの思い出や小学校の思い出の振り返りや将来の夢や中学校調べの題材（「We Can! 2」のUnit 9「中学校生活・部活動」で、中学校で勉強したい教科や部活動について発表する）で児童の発達段階に合わせて文型と題材が適切に配置されている。さらに、学校生活や地域の生活を表現する文型の出現は児童の身近な生活に関連が高く、英語習得が促進されると考える。異文化理解については、「We Can! 1」のUnit 6「行ってみたい国や地域」は5年生で学習するが、小学校では、「日本とのつながりのある国々」の観点から異文化理解を6年生後半で学習することから、他教科との整合性が気になる⁽⁶⁾。

教科書全体における題材と特定の文型の関連については、ほとんどの文型が2Unit以上に出現するように配慮されており、くり返し学習するような配慮がなされていると言える（但し、「We Can! 1」のUnit 7で出現するWhere is ~?, Go straight~, It is under/by/in/on ~等の表現はUnit 7のみの出現である）。

最後に特筆する点は、外国人との出会いが少なく、外国に行ったりとか外国で行動することはほとんどない児童にとって、題材や場面は自分のことや身近な生活に限定されており、外国人とのコミュニケーションはほとん

ど設定されていない。

4. 教科書を横断的に頻出する文型について

表1では、目標文型の出現回数が16回以上の重要文型に着目して、分析を行った。以下では、題材に関連した特定の文型ではなく、複数Unitを横断的に出現する文型について表3と表4にまとめ、9文型を抽出した。複数Unitを横断的に出現するとは本論では、3つ以上のUnitに出現し、16回以上出現している文型である。

表3と表4によると、各Unitを横断的に出現する文型は次の順序で多く出現している。最も横断的に出現率が高いのは、好きなことを表現する（I like apples very much. /What (sport) do you like?）文型で、出現のUnit数や頻度は最も高い。「We Can! 1」では、9Unit中6Unitに出現して頻度は72例で、「We Can! 2」では、9Unitすべてに出現して頻度は102例と非常に多い。次に多いのが自己紹介（Hello, /I'm ~. /Nice to meet you.）の文型で、「We Can! 1」では、9Unit中6Unitに出現して「We Can! 2」では、9Unit中8Unitに出現し、ほぼすべてのUnitに出現しており頻度も高い（85例）。3番目に出現率が高いのは、できること（I/ You/ He/ She can swim fast.）文型で、「We Can! 1」では、9Unit中3Unitと横断的に網羅はしていないが、出現頻度は129例と最も多く、「We Can! 2」では、9Unit中7Unitに出現し、頻度も高い（79例）。4番目に出現頻度の高い文型は、「～したいこと」（I want to 動詞～. (go to 除く)）で、「We Can! 1」では、9Unit中4Unitのみの出現だが、「We Can! 2」では、9Unit中7Unitに出現し、頻度も高い（56例）。これらの文型の特徴は自己についての紹介や好きなことを表現する文型やできる事やしたい事などの積極的かつ肯定的な態度や行動を表現する文型が全体的に網羅して頻繁に出現していると考える。一方、表1によるとDon't turn here. / Don't be noisy.とShe isn't a teacher.は出現が皆無で、他の否定的な表現

も出現頻度が少ない。児童の肯定的な行動や態度を重視する表現を多く出現させる傾向にあると推測されるが、日常生活では肯定と否定の表現は共に多用されるために、特に制限する必要はないだろう。

V. 結論と小学校英語教育への示唆

これまで小学校移行教材「We Can! 1」「We Can! 2」の文法の出現頻度と題材の関係について主に検証してきた。以下に、調査結果をまとめ、小学校英語教育への示唆を行う。

第1に、両教科書に出現する文型と第2言語早期習得研究とCEFR-J Grammar Profile (A1) で出現する文型は約88%の整合性があり、整合性は高いと言える。しかし、現在進行形、所有-'s、規則動詞 (enjoyedを除く)、

3人称単数現在-s、We are~.の5文型については出現しない。理由は、複雑な文法の説明をさけるためであると推測する。さらに、肯定的な態度や行動を表現する文型は多いが、否定的な表現については、出現が非常に少ない。多様な英語に会うグローバル社会では、会話においては3人称単数現在-sや規則動詞-edなどは意味のやりとりに支障はなく省略される傾向があり (Jenkins, 2000)、提示する文型の種類を厳密に限定する必要はないのではないか。

第2に、目標文型の出現については、両教科書で35文型を抽出した。「We Can! 1」では、頻度は422例 (平均12.1回) で、16回以上出現の文型は13文型 (37.1%) である。「We Can! 2」では、頻度は879例 (平均25.1回) で、16回以上出現している文型は17文型 (48.6%) である。16回以上出現している両教科書の平均42.9%の文型につ

表3：「We Can! 1」で横断的に出現する文型とその出現の頻度

文型 Unit	Hello, /I'm ~ . /Nice to meet you.)	I like apples very much. / What (sport) do you like?	I/ You/ He/ She can swim fast.	What do you want?/I want a new ball.	I want to 動詞 ~ .(go to 除く)	He is a (good) soccer player
Unit 1	9	34	0	12	0	5
Unit 2	0	13	0	8	0	0
Unit 3	4	12	0	0	6	0
Unit 4	2	0	0	0	0	0
Unit 5	1	5	50	0	1	0
Unit 6	3	0	53	0	11	2
Unit 7	3	0	0	0	0	0
Unit 8	0	4	0	2	0	7
Unit 9	0	4	26	0	1	7
合計	22	72	129	22	19	21

表4：「We Can! 2」で横断的に出現する文型とその出現の頻度

文型 Unit	Hello, /I'm ~./Nice to meet you.)	I like apples very much. / What (sport) do you like?	I/You/He/ She can swim fast.	I/ ~ want to 動詞 ~ . (go to 除く)	I like playing the piano. / I enjoy swimming.	He/She/It is ~ . (状態・気持ち)	We have ~ ./ What ~ do you have ~?
Unit 1	14	17	16	0	0	1	0
Unit 2	13	15	31	2	2	28	29
Unit 3	9	24	10	1	1	12	0
Unit 4	9	16	6	1	7	4	23
Unit 5	12	1	0	0	0	0	0
Unit 6	0	5	2	12	2	10	5
Unit 7	13	3	0	1	0	0	1
Unit 8	6	8	4	11	1	3	0
Unit 9	9	13	10	28	4	6	7
合計	85	102	79	56	17	64	65

いては、文型習得の条件を満たしていると言える。

第3に、出現する文型と題材の関連は、児童の思い出や夢、自分や他人、児童の身近な生活、日本や外国についての4カテゴリで、題材に合わせて文型が自然に出現する設定がなされている。児童の身近な生活や成長過程に関連性の高い文型が出現している。さらに、認知機能や発達段階の高い6年生では、単純に目標文型をくり返すことなく、小学校生活のふり返りやキャリア教育も含めた思考力や判断力、表現力を必要とする題材や文型の出現を考慮している点は評価できる。

第4に、教科書を横断的に頻出する9文型を抽出し、特に好きなことを表現する(例: I like apples.), 自己紹介(例: I'm ~), できること(例: She can swim fast.), したいこと(例: I want to~)の文型については、横断的に出現する頻度が高い。

小学校教育現場への示唆としては、学習指導要領ではリーディング、ライティングは指導することになっていないことから、実際の指導では習得時期に合わせた文型を必要に応じて提示してはどうだろうか。また否定文についても肯定文と同様に提示する必要がある。

本稿では文型の出現頻度から英語習得について検証したが、さらに教科書の語彙出現も検証することにより総合的な児童の英語習得の達成度が明らかになるのではないかと。今後は、本調査を踏まえた検定教科書分析の必要性があると考えられる。

注

- (1) 「We Can! 1」(5年)と「We Can! 2」(6年)との対応関係については、7社の検定教科書の教科書補助資料で説明されている。「Crown Jr.5年/6年」は『Let's Try!』/『We Can!』/中学校との連携で、「Here We Go! 5年/6年」は「編集趣意書」で、「Junior Sunshine 5年/6年」は「内容解説資料 教授用資料」で、「Junior Sunshine 5年/6年」は「内容解説資料 教授用資料」で、「New Horizon Elementary 5年/6年」「『We Can!』、『Hi, friends!』併用指導案」(https://ten.tokyo-shoseki.co.jp/spl/eigo/files/download_2017119676.htm)で、「One World Smiles 5年/6年」は「内容解説資料」で、「Blue Sky elementary 5年/6年」は「内容改札資料」で、「Junior Total English 1(5年)/2(6年)」は「学校図書 WEBパンフレット(“Let's Try!”と“We Can!”との接続)」(https://gakuto.co.jp/2020s_tokusetsu/webpamph/eigo-4.html)で示されている。

(2) 投野科研は、投野由紀夫(東京外国語大学)を研究代表者とし、2008年より12年間、国際的言語基準枠組みであるCEFR(Common European Framework of Reference for Languages)準拠の日本版であるCEFR-Jの理論的枠組みや具体的なCan-Doリスト、CEFR-Jに準拠した文法、text、タスクなどのデータベースを提供している研究チームである。

(3) What sport do you like?の文型は、What do you like?とは異なると考える場合はあるが、「We Can! 2」では、教科書全体では、What sport do you like?の文型は6文例のみで、例えば、What subject do you like?(指導書, p.6)のように系統的ではなく、単発に出現する文型であるために同じカテゴリとして数えた。

(4) I want to~は基本的に一つのカテゴリとして捉える考え方もあるが、疑問詞がwhatとwhereでは質問する内容が異なるために、疑問詞を中心に考え、分別した。

(5) 上の3の考えに従うと、疑問詞を中心に考える場合、What~?の疑問文とその応答文はひとつのカテゴリにまとめるべきだが、I want to be~は将来の職業等を表現する重要な文型なので個別に分類した。

(6) 社会科(6年生)の後半で外国について学習するために、「行ってみたい国」(『We Can! 1』Unit 6)の代わりに、2020年から使用されている検定教科書『One World Smiles 5』(5年生、教育出版社)では、「行ったみたい都道府県を伝えよう」(Lesson 6)の題材で国内に場所の変更がなされている。

謝辞

本研究は科学研究費補助金(課題番号19K00768)の助成を受けたものである。調査にあたり、教科書指導書から文型抽出の補助作業をした国際学群3年生の橋奈奈さんに感謝する。

引用文献

- Arnold, W., & Rixon, S. (2008). Materials for teaching English to young learners. In B. Tomlinson (Ed.), *English language learning materials: critical review* (pp.33-59). London: Continuum.
- Bland, J. (2015). Grammar templates for the future with poetry for children. In J. Bland (Ed.), *Teaching*

- English to young learners: Critical issues in language teaching with 3-12 years old* (pp.147-166). London: Bloomsbury.
- Brumfit, C. J. (1981). Teaching the 'general students'. In K. Johnson and K. Morrow (eds), *Communication in the Classroom: Applications and Methods for Communicative Approach*. London: Longman. (pp. 46-51).
- Council of Europe. (2001). *The Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 出口マクドナルド友香理 (2019)「小学校外国語科「We Can!」の教材分析－異文化理解の視点から－」『中部地区英語教育学会紀要』48巻, 89-96.
- Ghosn, I.-K. (2013). Language learning for young learners. In B. Tomlinson (Ed.), *Applied Linguistics and materials development* (pp.61-74). London: Bloomsbury.
- 平川晴菜・萬谷隆一 (2018)「思考力・判断力の視点からの国内外の小学校英語教科書・教材における活動分析」『北海道教育大学紀要』69巻1号, 139-147.
- Jenkins, J. (2000). *The phonology of English as an international language*. Oxford: Oxford University Press.
- Krashen, S. (1985). *The input hypothesis: issues and implications*. London: Longman.
- Lightbown, P.S. (2013). *How languages are learned (4th edition)*. Oxford: Oxford University Press.
- 文部科学省 (2017a)『小学校学習指導要領解説 外国語編』
- 文部科学省 (2017b)『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』.
- 文部科学省 (2017c)『We Can! 1 指導書』
- 文部科学省 (2017d)『We Can! 2 指導書』
- 文部科学省 (2019a)『Let's try! 1』東京: 東京書籍.
- 文部科学省 (2019b)『Let's try! 2』東京: 東京書籍.
- 文部科学省 (2019c)『We Can! 1』東京: 東京書籍.
- 文部科学省 (2019d)『We Can! 2』東京: 東京書籍.
- Nation, I.S.P. (2001). *Learning vocabulary in another language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 澁井とし子 (2019)「小学校外国語: 脳科学と第二言語習得の観点から」『獨協大学外国語教育研究所』7号, 37-53.
- 丹藤永也 (2019)「文部科学省小学校外国語移行教材『We Can!』にみる英語読み聞かせ教材の構成要件の分析」『青森公立大学論纂』4巻 (1, 2号), 39-51.
- Tomlinson, B. (2015). Developing principled materials for young learners. In J. Bland (Ed.), *Teaching English to young learners: Critical issues in language teaching with 3-12 years old* (pp.279-293). London: Bloomsbury.
- Tomlinson, B. (2017). Achieving a match between SLA theory and materials. In B. Tomlinson (Ed.), *SLA research and materials development for language learning* (pp.3-22). New York: Routledge.
- 東京書籍 (2016)『New Horizon English Course 2年生』
- 投野由紀夫研究室 (2020) *CEFR-J Grammar Profile*. http://www.cefr-j.org/download.html#cefrj_grammar (閲覧日: 2020年10月24日)

資料1：文型頻度集計表の一部抜粋（題材と文型の出現頻度の一部）

Unit活動		文型	I / enjoyed fishing. ~.	I went to Okinawa.	I / ~ saw ~.	I ate ~.	I / ~ want to 動詞~. (go除く)
Unit5: My Summer Vacation 夏休みの思い出	Let's Play		4	4		4	
	Let's Chant: Summer Vacation		2	2		2	
	Let's Chant :Summer Vacation2			5			
	Let's Listen 1		2	3	1	1	
	Let's Watch and Think1		2	2		2	
	Let's Listen 2		3	3		3	
	Let's Watch and Think 2		3	3			
	Let's Listen 3		4	4		4	
	Let's Read and Watch		1	1		1	
	Activity			1		1	
	Story Time			1	1		
	Let's Read and Write		1	3			
Unit 7: My Best Memory 小学校生活・思い出	Let's Watch and Think						
	Let's Chant: What's your best memory?		4				
	Let's Listen 1			1			
	Let's Listen 2		3				
	Let's Listen 3						
	Let's Watch and Think 2		1	1			
	Let's Watch and Think 3			1			
	Let's Watch and Think 4		1	1			
	Activity		1	1			
	Let's Read and Write		2	2			
	Story Time						1
	Small Talk		3				
Unit9: Junior High School Life 中学校生活・部活動	Let's Watch and Think 1						
	Let's Chant: What do you want ~ ?						6
	Let's Watch and Think 2						
	Let's Listen 1						2
	Let's Watch and Think 3						
	Let's Listen 2						1
	Let's Watch and Think 4						
	Let's Play				1		4
	Let's Watch and Think 5						3
	Activity						2
	Let's Read and Write				2		2
	Story Time						
Let's Listen 3						1	
Let's Listen 4						7	

Frequency of sentence patterns and topics in elementary school English textbooks: *We Can! 1* and *We Can! 2*

Masanori TOKESHI

Abstract

This study aims to identify the relationship between the frequency of sentence patterns and topics in two elementary school English textbooks, *We Can! 1* and *We Can! 2*. The results indicate the following. First, a total of 35 sentence patterns were found. In *We Can! 1*, the frequency of these patterns was identified in 422 samples (mean: 12.1) and in *We Can! 2*, the frequency was observed in 879 samples (mean: 25.1). An estimated 42.9% of sentence patterns, which appear over 16 times, satisfy the conditions of language acquisition (Nation, 2001). Second, there was a corresponding match, estimated at about 88%, between sentence patterns found in the two textbooks and the list of sentence patterns recommended in early childhood second language research as well as CEFR-J Grammar Profile (A1). However, there were five sentence patterns that did not appear: *present progressive*, *possessive-'s*, *past regular verb* (only “enjoy” appeared), *third singular-s*, and *we are*. Third, the relationship between sentence patterns and topics indicates a strong relevance for students, in terms of familiarity in everyday situations and their development stage. Topics are grouped into four categories: student’s memories and dreams, self and others, everyday situations, Japan and foreign countries. Lastly, there were 9 sentence patterns that frequently appeared throughout the textbooks. These included sentence patterns such as: I like apples (ex.), *I m ~* (ex.), She can swim fast. (ex.), *I want to ~* (ex.).

Keywords: listening, elementary school English education, textbook analysis, second language acquisition research, CEFR-J